



昨年開催した「仏像ひな型の世界」展の第2弾！江戸時代から平成まで15代にわたって系譜を連ねた京都仏師・畑治良右衛門が伝えてきた雛型420件のなかから、今回は展示しなかった雛型や、畑治良右衛門に関する新資料などを交えながら展覧します。造像時のいわば裏方的な存在である雛型を通して、江戸時代の仏師たちの活躍を感じ取っていただけましたら幸いです。

雛型とは

雛型は建築でいえば設計図面にあたる存在です。大きな仏像をどのようにして効率的に制作するかを考たり、あるいは注文主である施主や発願者にみせる完成予想図としての役割などを果たしたのでしょう。さらに、完成品は注文主に納めれば手元を離れてしまうため、どの像をどのような木組で制作したかを記録する手控えとしても役立ちます。小さな雛型ではありますが、彫像を制作する仏師やその工房にとってはまさに財産に値します。

3 上林竹庵坐像かんばやしちくあんざぞう・4 俗人坐像ぞくじんざぞう／江戸時代

420件の雛型群のなかには、No.3と4のように、よく似た雛型が存在します。No.3は、像底の銘文から上林政重(号:竹庵、1550～1600)の肖像の雛型であるとわかります。No.4は、墨書から人物の特定はできませんが、No.3と瓜二つの姿をしています。よく似た雛型の存在は、雛型から雛型を写すという仏師の修行の1つとして行われたことを示しています。彫刻の完成度の高さや銘文の情報量の多さから、No.3を写したのがNo.4であると考えられます。

7 文昭院坐像もんしょういんざぞう・8 文昭院像頭部もんしょういんぞうとうぶ／江戸時代

ともに文昭院(徳川家宣)の肖像の雛型。No.7(像高10.3cm)の像底墨書から、完成品は像高50cmほどであると分かります。一説には美男子であったとされる家宣の顔は、No.7では小さいためによくわかりませんが、完成品の原寸に近いNo.8ではその顔立ちの特徴が確認できます。像全体を把握する雛型と、細部を確認するものとして用途をわけて制作されたと考えられます。

10 黙山元轟胸像もくざんげんごうきょうぞう／江戸時代 明和元年(1764)

埼玉・迦葉院に伝わる黙山元轟(1683-1763)の肖像彫刻の雛型。黙山の弟子・龍山呑江が1780年頃に制作し、黙山の百回忌にあたる文久2年(1864)に再興(修理)されたと伝わります。雛型の背面には明和元年の年紀があります。黙山没後すぐに本雛型がつくられ、その後しばらくして、雛型を基に同院に伝わる肖像を制作したと想像されます。



15・16 にょらいぞう とうぶ 如来像 頭部 /江戸時代

ともに如来像の頭部のみの雛型ですが、首の皺に注目すると違いがわかります。No.16は、のど元から斜めに皺が入っています。つまりNo.15は通常の正面向きの如来ですが、No.16は左後方を振り返ったいわゆる「見返阿弥陀」の雛型です。京都・禅林寺（永観堂）の本尊が名高いものの、けっして数が多いとはいえない珍しい像容の阿弥陀如来です。畑治良右衛門の雛型群のなかには、見返阿弥陀のほかにも類例の少ない仏像の雛型が存在し、江戸時代の多彩な信仰の様相がみえてきます。



31 じこくてん ぞうちょうてんけんぞくりゅうぞう 持国天・増長天 眷属 立像 /江戸時代

「持国／ワキ立」「増長／ワキ立」と背中に墨書されており、持国天と増長天の眷属として造られた脇侍像であることがわかります。四天王の眷属像は、東京国立博物館と東京・静嘉堂文庫美術館、神奈川・MOA美術館に分蔵されているもの（内山永久寺伝来）が数少ない彫像の遺品です。なかなか見かけない珍しい尊像に出会えることは、江戸時代の彫刻・雛型の楽しみの1つでもあります。

39 そうしんびしやもんでんりゅうぞう 双身 毘沙門天 立像 /江戸時代

2体の天部形像が背中合わせに立つという特異な尊像です。多くの場合、2体とも毘沙門天であることから双身毘沙門天と呼ばれます。ただし、『阿娑縛抄』巻第137「双身法」では毘沙門天が2体組み合わされた図像だけでなく、毘沙門天と吉祥天とが合体した姿についても説かれています。実際に尊格の異なる2体が組み合わされた珍しい作例です。

七条仏師と雛型

45 じゅうにしんしょうりゅうぞう とら うま ひつじ さる とり いぬしん 十二神将 立像 のうち 寅・午・未・申・酉・戌 神 /江戸時代

背中の墨書から十二神将のうちの6神であるとわかります。酉神以外の5神の身に着ける鎧の形式やポーズ、寅・申神にいたっては表情までも東寺金堂薬師如来像の台座に取り付けられた十二神将に近似しています。東寺像は、慶長9年（1604）より康正を中心として康猶・康英らによって造られました。本雛型のイメージソースに東寺像があったことは明らかで、東寺大仏師職を継承する七条仏師はもちろん、その周辺の仏師にとって東寺の仏像は大きな影響力を持っていたのでしょう。

泉涌寺と雛型

東山の山腹に伽藍を構える泉涌寺は、京内の諸寺院と同じく応仁の乱や長く続いた戦国の混乱による災禍に見舞われました。江戸時代に入ると、朝廷や幕府の寄進・援助により、伽藍堂舎の大造営が行われます。寛永期（1624～44）・寛文期（1661～1672）の泉涌寺大造営では七条仏師たちも仏像の修理・新造に腕を振りました。

46 か もみょうじんざぞう 賀茂明神 坐像 /江戸時代 寛文8年（1668）

現在は泉涌寺で伽藍神（女神）とされ、『泉涌寺殿堂色目』（享保3年〔1718〕）によるとかつては「賀茂大明神」と呼ばれていた像の雛型。泉涌寺像は、康乗を中心とする寛文年間の同寺大造営のなかで、寛文8年に造像されました。雛型にみる久七と康寿は、康乗に付き従っていた仏師。「座像一尺一寸」は泉涌寺像の坐高（37.8 cm）に合致します。



47 ^{ごこうごんてんのう} 後光 厳 天皇 ・ ^{ごえんゆうてんのうざぞう} 後円融 天皇 坐像 /江戸時代



泉涌寺別院である雲龍院に現存する後光厳天皇・後円融天皇坐像の雛型。両像の体部は康知（?～1661）によって寛文16年（1639）につくられました（頭部は南北朝時代）。雛型の像底には康音（1598～1682）の事績として記されていますが、仏師系図の記載に倣ったものと考えられます。よって本雛型は、両像が完成した後に、工房の手控えとして制作されたものでしょう。

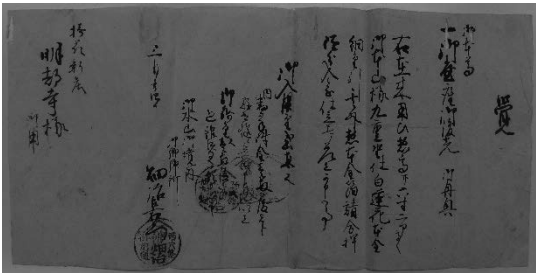
49 ^{しじょうてんのうざぞう} 四条 天皇 坐像 /江戸時代 寛文7年(1667)



京都・泉涌寺霊明殿に安置される四条天皇坐像の雛型。「泉涌寺再興日次記」や「大仏師系図」によると、泉涌寺像は寛文6年に康乗が造像を始めたといえます。雛型と完成品は衣文の皺などが近似しており、本雛型は実際に泉涌寺像の造像に携わった人でなければ造れません。ただし、完成品と雛型を比較したところ、木寄せは同一ではなく、像の大きさの比率も異なります。雛型が造像前のものか造像後のものかは判断し難く、「大きな仏像を制作する前の縮小模型」という定義だけでは理解できない、雛型の用途については今後も検討を要します。

畑治良右衛門と雛型

50 ^{みょうきょうじほんぞん だいざ} 明教寺 本尊 台座 ・ ^{こうはいさいこうちゅうもんしよ} 光背 再興注 文書 /江戸時代



畑治良右衛門による覚書。浄土真宗明教寺(大阪府大阪市)本尊の台座および光背の修復についての記録であると考えられ、寸法や形式、費用に関する詳細をうかがうことができます。また、差出には「御本山御境内御佛師所」の記述が見受けられ、畑治良右衛門の経歴の一端が推察されます。

52 ^{じゅうにしんしやうりゆうぞう} 十二 神将 立像 のうち ^{いのししん} 亥 神 /江戸時代

「～の写し」と記されており、自らの工房において制作したことの証として、あるいは手控えとして造った雛型でしょう。本雛型は滋賀・延暦寺根本中堂安置の十二神将立像のうちの亥神に該当します(根本中堂の再建期である1642年頃の造像とされる)。また延暦寺像の丑神からは「寛政年十二月／京六条畑常治郎／再興之」との銘文が近年発見されました。



54 ^{ずあんしゅう} 図案集 /江戸時代～現代

15代畑治良右衛門のもとに伝わった折本装の図像集。様々な仏像や高僧の図像、須弥壇や宮殿の設計図などを描きとめたり、御札も貼り交ぜ、唐子と遊ぶ風神雷神など、内容は多岐にわたります。No.53が参考書や辞書の役割であったの対して、プライベートで実用的な日々のアイデア集といった内容です。

出品リスト

出品番号	名称	員数	法量 (cm)	時代	材質	銘文
雑型とは						
1	金剛力士立像	2 軀	阿：像高17.8 吽：像高17.7	江戸時代	木造	
2	大燈国師坐像	1 軀	坐高7.8	江戸時代	木造	像底「けさの／むすびハ／つねのとこ／なり」 裾裏「大燈国師之木形／かたぎり久七作／式尺三寸／左京康朝」
3	上林竹庵坐像	1 軀	像高8.4	江戸時代	木造	像底「宇治茶師／上林竹庵御影木形／大佛師／法眼康知」
4	俗人坐像	1 軀	像高7.9	江戸時代	木造	像底「しるし」
5	徳川家光坐像	1 軀	像高7.9	江戸時代	木造	像底「太政大臣源家光公／御影之木形／大佛師法眼康知／奉彫刻者也」
6	徳川家光坐像	1 軀	像高7.9	江戸時代 万治2年 (1659)	木造	像底「□□／座像式寸／家光公／□願□小願／萬治二年／〔亥〕 式月吉日」
7	文昭院坐像	1 軀	像高10.3	江戸時代	木造	像底「五分一／文 昭院 尊形」 首背面「文昭院」
8	文昭院像 頭部	1 個	高18.3	江戸時代	木造	背面「文昭院様／尊形」首底部「文昭院」
9	潮音和尚坐像	1 軀	像高6.5	江戸時代	木造	裾裏「黄 山／玉寿院／黒滝山／願音和尚／法口」
10	黙山元轟胸像	1 軀	高9.8	江戸時代 明和元年 (1764)	木造	背面「武州幸房／迦葉院開山／葉／黙山和尚面／明和元〔申〕十月／三十世左京父／法眼湛茹作」
11	僧形像 頭部	1 個	高9.9		木造	
12	幸道和尚像 頭部	1 個	高11.4	江戸時代 文久元年 (1861)	木造	側面～背面「大坂／舍利寺／幸道和尚影／于時文久元年／辛酉九月吉日／康教作」
13	太客和尚胸像	1 軀	高8.0	江戸時代 寛政3年 (1791)	木造	背面「丹州桂林／中興太客／大和尚御面／寛政三〔亥〕／三月／法眼左京」
14	僧形像 頭部	1 個	高9.5	江戸時代	木造	側面～背面「律師／山口雪溪ノ写」
15	如来像 頭部	1 個	高17.6	江戸時代	木造	首底「忠印／三十二世左京／康朝／首作之」
16	如来像 頭部	1 個	高22.3	江戸時代	木造	
17	釈迦涅槃像	1 軀	長16.0	江戸時代	木造	
18	苦行釈迦坐像	1 軀	像高10.4	江戸時代	木造	
19	大権修利菩薩坐像	1 軀	像高12.6	江戸時代	木造	
20	達磨大師坐像	1 軀	坐高13.0	江戸時代 寛政6年 (1794)	木造	裾裏「達 磨 □□像四寸／寛政六年〔寅〕／三月大佛工卅一／左京／康 磨 □□」
21	不動明王坐像	1 軀	像高8.8	江戸時代	木造	像底「小野延命院／□□尊神之／うつし／〔□□〕右□□□□」
22	不動明王像 頭部	1 個	高10.5	江戸時代 享保12年 (1727)	木造	背面「法眼康傳」 首底「享保十二未／宿月十二日」
23	矜羯羅童子立像	1 軀	高9.7	江戸時代	木造	背面「法眼／且條作」
24	矜羯羅童子胸像	1 軀	高8.5	江戸時代 安永4年 (1775)	木造	背面「金迦羅之／面」 像底部「安永四年／未七月／大仏師廿九世／法眼且徐／作之」
25	帝釈天立像	1 軀	高16.9	江戸時代	木造	背面「クウキハ／式尺壹寸／□ひく」
26	双身歡喜天立像	1 軀	総高23.0	江戸時代	木造	

出品番号	名称	員数	法量 (cm)	時代	材質	銘文
27	摩利支天坐像	1 軀	像高7.4	江戸時代 宝暦6年 (1756)	木造	像底部「宝暦六〔子〕／十月十二日／如法 ／摩利支天／形割石野専右衛門／作之」
28	天部形立像	1 軀	像高12.5	江戸時代	木造	
29	優填王立像	1 軀	総高11.0	江戸時代	木造	
30	十二神将立像のうち戌神	1 軀	像高13.3	江戸時代	木造	正面「太刀／つか持」 背面「いぬ」
31	持国天・増長天眷属立像	2 軀	持国天眷属：像高10.6 増長天眷属：像高10.0	江戸時代	木造	持国天眷属：背面「青色／持国／ワキ立」 増長天眷属：背面「黒色／増長／ワキ立」
32	聖徳太子孝養立像	1 軀	像高15.8	江戸時代	木造	背面「廿七世／法橋康傳作／川原町高田 写」
33	聖徳太子孝養立像	1 軀	像高12.4	江戸時代	木造	背面「太子／三十四世／康敬作／一身田調 進」
34	聖徳太子坐像	1 軀	像高7.9	江戸時代 嘉永元年 (1848)	木造	像底「嘉永元〔己〕酉年／聖徳太子／四十 二才之像／三十四世／法橋康敬作」
35	隨身坐像	1 軀	坐高7.9	江戸時代	木造	像底「江戸／山王門写／康知作」
36	日光宮隨身院坐像	1 軀	像高8.6	江戸時代	木造	像底「日光御宮様像／御手徳クキヤシヤ／ 御刀クツツクリ／御横尾先上り少披／御帳 子大キク／御袖先上り少披／三十一世大貳 作／随躰院様像」
37	楠木正成坐像	1 軀	坐高11.9	江戸時代	木造	背面「楠像／全慶院へ／口置／大坂八丁／ 寺町」
38	厨子入苦行釈迦坐像	1 軀	像高7.4	江戸時代	木造 彩色	
39	双身毘沙門天立像	1 軀	総高14.8	江戸時代	木造	
40	厨子入茶吉尼天騎狐像	1 軀	総高13.3 (狐含む) 像高9.3	江戸時代	木造 彩色	
七条仏師と雛型						
41	天部形立像	1 軀	像高13.5	江戸時代	木造	背面「運慶」
42	地藏菩薩像 頭部	1 個	高8.7		木造	正面～背面「運慶／□□三／□□□／□□ ／立像壱尺ノ面ノ子ノ三月十四日」
43	善導大師胸像	1 軀	高9.0	江戸時代 享保4年 (1719) また は享保5年 (1720)	木造	左肩剝面「□て□／□□□／□□／□」 背面「善導／御頭／衣鉢別ニ／ウツス」 右肩剝面「享保四庚子／二月十五日」 像底「本像式尺五寸／本山幣丹寺／善導院 尊形／運慶作写／大仏工康意■／(内)■■■ (作)」
44	持国天胸像	1 軀	高9.3	江戸時代 寛延3年 (1750)	木造	左肩剝面「寛延三年／正月廿九日／ツクラ イ／□□」 背面「東寺金堂／四天王之内／持国天王面 ／享保十七〔子〕歳／三月下旬／大佛師廿 八代／法眼康傳作」
45	十二神将立像のうち未神	1 軀	像高14.9	江戸時代	木造	背面「ひつじ」
	十二神将立像のうち戌神	1 軀	像高14.4	江戸時代	木造	背面「いぬ」
	十二神将立像のうち寅神	1 軀	像高14.6	江戸時代	木造	背面「とら」
	十二神将立像のうち酉神	1 軀	像高14.7	江戸時代	木造	背面「とり」
	十二神将立像のうち午神	1 軀	像高15.1	江戸時代	木造	背面「第／午／珊底羅」
	十二神将立像のうち申神	1 軀	像高14.2	江戸時代	木造	背面「さる／アンテイラ／安底羅大将／上 □廿九」

出品番号	名称	員数	法量 (cm)	時代	材質	銘文・制作年など
泉涌寺と雛型						
46	賀茂明神坐像	1 軀	像高9.2	江戸時代 寛文8年(1668)	木造	像底「寛文八〔戊申〕年□来」 裾裏「泉涌寺之御細工之時賀茂明神ノ木形座像一尺一寸久七康寿作」
47	後光厳・後円融天皇坐像	1 軀	像高12.2	江戸時代	木造	像底部「後光厳院様後圓融院様御両代御影之木形泉涌寺之内雲龍院二有長國寺被仰付大佛師法眼康音時奉彫刻者也」
48	釈迦如来像 裳裾部断片	1 個	長11.4	江戸時代	木造	背面「泉涌寺三尊佛之内釋迦のものさかり写」
49	四条天皇坐像	1 軀	像高8.8	江戸時代 寛文7年(1667)	木造	像底「泉涌寺御影堂四條院宸影自太上法皇御造立傳奏勸修寺經廣卿大佛師〔某〕奉彫刻者也于時寛文七〔丁未〕七月日大佛師二十五代住康乘記之」
畑治良右衛門と雛型						
50	明教寺本尊台座・光背再興注文書	1 通		江戸時代	紙本墨書	
51	弘法大師坐像	1 軀	像高8.8	江戸時代 文化14年(1817)	木造	像底「文化十四□田佛師畑治郎右衛門□弘法大師」
52	十二神将立像のうち亥神	1 軀	像高16.1	江戸時代	木造	背面「毘叡山中堂十二神之内うつし康知」
53	増補諸宗仏像図彙 第2～5巻	4 冊		明治時代	紙本木版墨摺	
54	図案集	1 冊		江戸時代～現代	紙本木版墨摺・淡彩	

・本資料は、龍谷大学龍谷ミュージアムで開催される特集展示「仏像ひな型の世界Ⅱ」(2021年2月20日～3月28日)の解説および出品リストである。

・作品番号は陳列番号と一致するが、陳列順とは必ずしも一致しない。

・出品作品のうち、銘文の翻刻については原則として旧字体を用いた。また「/」は改行を、〔〕内は割註をあらわす。

・「畑治良右衛門」の表記については、「畑治郎右衛門」などいくつか存在するが、本展覧会においては「畑治良右衛門」に統一した。

・作品解説はNo.50は大森佳恵、その他の作品解説および章解説などは丹村祥子(以上、龍谷大学 龍谷ミュージアム)が執筆した。

銘文の翻刻は大森佳恵、吉竹智加が担当し、丹村祥子が監修した。

・本展の開催にあたり下記の方々からご協力ならびにご教示を得た。(五十音順、敬称略)

雲龍院 延暦寺 泉涌寺

宇代貴文 王珏人 川瀬由照 見学知都世 柘植健生 中江夏帆 西谷功 長谷洋一 藤岡穰 安井雅恵 山口隆介 山下絵美 Daniel Borengasser